第２課　ダニエルと終末時代

【暗唱聖句】

王はダニエルに言った。「あなたがこの秘密を明かすことができたからには、あなたたちの神はまことに神々の神、すべての王の主、秘密を明かす方にちがいない。」ダニエル2:47

【今週のテーマ】

ダニエル書を通して、個人的に信仰と証によっても、神様の働きが大きく進んでいくことを学びます。

【日曜日・ごく小さなことに忠実であれ】

「ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である。ごく小さな事に不忠実な者は、大きな事にも不忠実である。」ルカ16:10

小さなことに対して妥協し不忠実であることは、それほど大きな問題ではないと考えがちです。しかし、その小さな妥協はさらに次の妥協につながり、やがて大事なことに対しても不忠実なものとなってしまうのが人間です。しかし、神様がまずわたしたちに要求されていることは小さなことなのです。その小さなことに忠実に生きるとき、神様から信頼を受けやがて神様の大きな働きを任せられるようになっていくことでしょう。そのような例がダニエル書の中にも見られます。

バビロン捕囚によって南ユダから連れてこられた4人の若者たちは、王の好意によって提供された豪華な食事に対して、野菜だけを食べさせてくれるように要求します。これは彼らにとって神様に対する忠実さを表す行為でありましたが、彼らの知恵と理解力は他の者たちと比べて十倍も優れていたと聖書に書かれてあります。食べ物と知恵や理解力を直接結び付けて考えるというよりも、神様から言われた食べ物に対して忠実であったことが、彼らに求められた知恵と理解力につながっていったのです。これは今日生きるわたしたちも同じです。今日わたしたちがなすべき小さなこととは何でしょうか。神様はどのような小さな忠実さを求めているでしょうか。

【月曜日・ダニエルの謙遜】

ダニエル書2章には有名なネブカドネザル王の夢とダニエルの解き明かしの物語が登場します。神様はヨーロッパを中心としてこれから世界に起こる未来の光景を、ネブカドネザル王に夢で見せられました。そして、わたしたちがヨーロッパの歴史を振り返った時、神様が見せられた夢の通りになっていることがわかります。このことは神様が実在し、過去も現在も未来もすべてを神様のみ手の中にあることを証明しています。

王が見た夢について、はじめ誰も解き明かすことができませんでした。そもそも夢を見た王自身、どんな夢だったのか思い出せなかったのだから無理もありません。しかし、このような状況の中でもダニエルは全知全能の神様ならすべてをご存じあるとの信仰がありました。このような信仰は1日、2日で生まれるものではありません。常日頃から、小さなことに忠実であったからこそ、このような大事な場面において、その経験を活かすことができたのです。

しかし、王の夢をすべて解き明かしたダニエルは、自分を誇ることなく謙遜でした。「秘密を明かす天の神がおられ」（ダニエル2:28）ると、すべての栄光は神様にあることを証したのでした。現代生きるわたしたちも同様に、主を誇るものでなければなりません。そして、わたしたちを謙遜にさせてくれるものは、キリストの十字架です。十字架を前にして自分を誇れるものなどいないのです。

【火曜日・金の像】

ダニエル書3章にも有名な物語が登場します。それはダニエル以外の3人のユダヤ人の青年が、金の偶像を拝まなかったために火の燃え盛る炉の中に投げ入れられるという物語です。この物語は黙示録13章とつながりがあります。

「ネブカドネツァル王は一つの金の像を造った…ネブカドネツァル王の建てられた金の像の前にひれ伏して拝め。ひれ伏して拝まない者は、直ちに燃え盛る炉に投げ込まれる。」ダニエル3:1～6

「わたしはまた、もう一匹の獣が地中から上って来るのを見た…この獣は…地とそこに住む人々に、致命的な傷が治ったあの先の獣を拝ませた…更に…先の獣の像を造るように、地上に住む人に命じた。第二の獣は、獣の像に息を吹き込むことを許されて、獣の像がものを言うことさえできるようにし、獣の像を拝もうとしない者があれば、皆殺しにさせた」黙示録13:11~16

両方の聖句の共通点は強制された礼拝が中心となっていることです。まもなく、政治的な権力によって創造主なる神様以外のものを礼拝するように強制される時が来るということです。

「…もしも拝まないなら、直ちに燃え盛る炉に投げ込ませる。お前たちをわたしの手から救い出す神があろうか」ダニエル3:15

偶像崇拝への強要を拒むなら、命の危険にさらされるような状況の中で、わたしたちはどうすべきでしょうか。世の権力者は「お前たちをわたしの手から救い出す神があろうか」と言ってあざ笑います。神様は必ず守ってくださると信じていますが、その保証があるわけではありません。神様のみ心が成就するのであって、わたしたちの思い通りになるとは限らないからです。だから彼らは王にこう答えます。

「わたしたちのお仕えする神は、その燃え盛る炉や王様の手からわたしたちを救うことができますし、必ず救ってくださいます。そうでなくとも、御承知ください。わたしたちは王様の神々に仕えることも、お建てになった金の像を拝むことも、決していたしません」ダニエル3:17、18

「そうではなくとも…」と言わざるをえないのはよくわかります。しかし、彼らが素晴らしいのは、たとえそうでなくて「わたしたちは王様の神々に仕えることも、お建てになった金の像を拝むことも、決していたしません」と宣言することができたことです。小さなことに忠実であった彼らは、このような究極のときも、信仰がぶれることがなかったのです。

【水曜日：異邦人の回心】

「すべて地に住む者は無に等しい。天の軍勢をも地に住む者をも御旨のままにされる。その手を押さえて何をするのかと言いうる者はだれもいない」ダニエル4:32

ネブカドネザル王は神様の力を知り驚きました。しかし、それは回心したのとは違いました。絶対的権力の中に生きてきた者が心を低くし、神の御前にひざまずくのは簡単なことではありませんでした。しかし、やがてそんなネブカドネザル王も少しずつ変えられていき、高慢な王が謙遜な神の子になっていきます。それは神様のみ手を押さえて何もすることができないことを悟り、また真に偉大なる王とは、真にいつくしみ深くあることを学んだからでした。このような王の変化は、ダニエルたち青年の信仰に感化されることが大きかったのです。妥協することなく神様への信仰を貫いた彼らの姿を通して、絶対的な王の心さえ変えていったことを思うと、わたしたち一人ひとりにも、小さなことに忠実に生きる信仰の歩みを通して、やがて人々に神様を伝え、変えていく力があるということです。

【木曜日：ダニエルの忠実さ】

①

「大臣や総督は、政務に関してダニエルを陥れようと口実を探した。しかし、ダニエルは政務に忠実で、何の汚点も怠慢もなく、彼らは訴え出る口実を見つけることができなかった」ダニエル6:5

ダニエルは忠実で、汚点や怠慢さがなく、訴える口実を見つけることができませんでした。クリスチャンはこの世のことで批判されてはなりません。

②

悪魔は神様を憎み、神様以外のものをわたしたちに拝ませようとします。世の終わりにそれはいよいよ顕著になっていきます。

③

祈ることによって命の危険が及ぶことがわかっていながら、ダニエルは祈りをやめませんでした。祈りをやめることを正当化できる理由はあったのに、彼は神様との祈りをやめませんでした。わたしたちも祈りをやめて良いと正当化できるものは何もないといことです。

④

祈ることはダニエルの習慣でした。大切な神様との交わりのときでした。祈らなければならない特別な理由があってもなくても、祈りのときを大切にすることは神様の御心です。

⑤

ダレイオス王は「お前がいつも拝んでいる神がお前を救ってくださるように」とダニエルに向かって言いました。これはダニエルが信じている創造主なる神はいかに力を持っておられるのかを王が認めていた言葉と受け取ることができるでしょう。これもダニエルと接している中で王が感じ取ったことだと思われます。